４．３ 新田開発（黒鍬かせぎ）

「知多市誌」資料編一所収の「近世村絵図」を見てもわかるように、知多市域 16 カ村における新田開発は意外に少ない。一般に新田とは、尾張藩では慶長 13 年（1608）の備前検地以後に開発された田畑をいい、それ以前の田畑を本田畑というのに対して新田畑といっている。

当地方の村勢を知る記録「寛文村々覚書」に記されている新田を見ると、江戸時代初期の新田開発のようすを知ることができる。寺本四か村は全体で 5,450 石余であるのに新田は 17 石余であり、朝倉村・古見村・岡田村・鍛冶屋村・羽根村・大興寺村などはいずれも 10 石にも満たない。わずかに森村が 33 石余、大草村が 42 石余、北粕谷村が 24 石であり、最も多い南粕谷村でも 60 石足らずで、本田畑 800 石余に対して 7.5%の増加でしかない。

当地方の開発が土地の条件からして、当時の技術で開墾可能なところは、すでにほとんど開墾していた事を示すものであろう。それは、また寛文年間以後幕末に至るまでの 200 年間でも、231 石余の増加にとどまっていることからも裏付けられる。

そんな中で、江戸時代後期においては、文政 11 年（1828）から天保 3 年（1832）までの数年間に寺本新開（天保 2 年開発）のような海岸の干拓による大規模な開発が行われていることなど興味深い。

尾張藩では、正保年間（1640 年代）の熱田新田を始めとして 18 世紀から 19 世紀にかけて海東郡、海西郡の南部海岸が次々に埋め立てられ、干拓されて新田化していった。

こうした新田は、高潮による災害や、多額の建設費を必要としたにもかかわらず、成功時の利益が莫大であることから、有力商人や富農たちによって進められていった。

また、近世における新田村の成立に近い形態を持つ寺本新田がある。寺本新田は原または原新田と呼ばれて、近代になって八幡新田とも、亥新田とも呼ばれた地のことである。寺本新田は慶長年間に中島・平井・廻間の三村の人たちで開拓されたと伝えるが定かではない。寺本新田は江戸初期に開発が始まり、しだいに定住者も増え、中期には 40 戸近くの人家が集まり、鎮守の杜を設け、寛政年間（1790 年代）には満徳寺も建立されて、新田村としての形態を形成していった。

さらに、特筆に値するのは、現知多市域の農民が、現在の三重県木曽岬村の開発にあたっていたことである。即ち木曽岬村は木曽川の川口に位置し木曽川と鍋田川にはさまれた三角州の上の輪中村であるが、近世初期より各地の農民が開発に当たっていた。

古見村の富田彦兵衛は 17 世紀中頃に、「西対海地」・「和泉」・「中和泉」を開発した。

寺本村の大橋六兵衛も同じころ「近江島」・「東対海地」を開発し、その子孫が「小林島」を開発している。

黒鍬稼ぎ

江戸時代を通じて知多の村々の大部分から他郷へ黒鍬人足が出かけたように、現知多市域の村々においても、黒鍬稼ぎは、出稼ぎの代表的なものであった。天保年間（1830-1843）の記録と推定される「知多郡之記」（蓬左文庫蔵）には、知多市域 16 カ村の内、大草村を除く 15 カ村が黒鍬人足を出していたことが記されている。

黒鍬とは、「鍬仕事に黒い（玄い）」というのが語源といわれ、山間や谷あいの田畑の切り開き、雨池（かんがい用のため池）の築造、海岸での新田開発、さらには道普請の土木工事に従う人々のことであった。

知多の黒鍬人足は、「畝まし」・「床しめ」等の技術が優れていて、各地で重宝がられた。黒鍬の技術は知多市のいたるところに今も残っているが、その例をあげると、堀之内城の中腹に残る割石積の石垣・佐布里の西谷から井洞に通ずる切通し・八幡神社の本殿基礎の石垣などがある。

彼等は鍬頭を中心に10数人から数10人が集団をなして出稼ぎに出た。藩内はもとより、三河・信州方面・遠くは和泉・摂津、関東方面へも出かけたと伝えられる。知多市においては、南部の大野谷には大野鍛冶という出稼ぎの風習があり、多くの者がそちらに出たようで、黒鍬稼ぎは、八幡地区が中心であったようである。明治時代以降の記録が伝承で残っているが、そのうちの一部を紹介する。

・明治15年、尾張北部から美濃にいたる内津十下の道路切り下げ工事
・明治19年ごろ三河国西加茂郡小原村方面にて黒鍬仕事
・明治26年伊豆国湯ヶ島から小鍋までの天城峠六里のうち加藤鉞次郎が一里半を担当
　遠州東海組の配下
・明治33年、甲斐国船津の湖水（河口湖）干拓工事申請に伴う稲作試験に参加
・明治35年、八幡七曲池の中池工事を大橋安兵衛氏の名義で神谷仙太郎が担当
・明治37年、郡道亀崎街道工事にあたり神谷仙太郎氏は黒廻間池から佐布里のとりつきまでを担当

出稼ぎの期間は、秋の収穫を終えた後から翌春の八十八夜までが普通とされている。ただし、年間を通しての出稼ぎの例もある。

エピソード

・明治38年冬・信州大平街道の山津波

伊那谷の飯田から木曽谷の妻籠へ抜ける大平線の道路工事に、妻籠部落の奥村組の配下として参加。明治38年は春から雨の多い年であったが、木曽谷に61年ぶりの山津波があり、川を越えた対岸に設営してあった飯場を襲ってきた。新しい鍬子の募集に現場を離れていた加藤鉞次郎氏は、急の知らせで引き返すと、21人の犠牲者中18人は村から連れてきた若者であった。

家族との連絡をとる間、小屋に遺骸を安置して番をしたが、白衣の上に血がにじみ出し、夜の灯火に照らし出されて凄惨をきわめたという。遺体のひきとりに現地へ来た遺族は、ただ一人だけで、17人の骸は現地の厚意により村はずれの墓地に細長い溝を掘って埋めてきたという。

・上方落語　桂ざこば師匠の十八番に　「狸の化寺」という演目があるが、そこに、黒鍬稼ぎに出た人たちが登場する。

（参考　「知多市誌」本文編 P244-250）

「1905（明治38）年」に訂正

中　日　新　聞　２０１２年（平成２４年）５月１２日（土曜日）知多版

半島の出稼ぎ集団「黒鍬」
郷土史家ら供養訴え
工事中事故死、長野で眠る

明治時代に出稼ぎ先の長野県内で土石流で死亡し、同県南木曽町の雑木林に埋葬されている知多半島の土木作業集団「黒鍬」の労働者約二十人を弔う動きが郷土史家らの間で始まっている。

知多市の郷土史家、故杉崎章さんの文献によると、黒鍬の人たちは一九〇四（明治三十七）年に長野県の南木曽町と飯田市をつなぐ大平街道の道路工事をしている際に事故に遭った。遺体の多くは知多に引き取られず、南木曽町吾妻の漆畑地区の地元の墓地の隣に埋められた。

南木曽町には、地元の長延寺にある石碑に犠牲者の人数が記してある他に、事故の記録はほとんどない。百年余りが過ぎ、墓石もない埋葬地には草木が生い茂る。

杉崎さんと交流のあった長野県塩尻市の郷土史家楯英雄さん（七六）は「不幸な事故に遭い故郷にも戻れず、今では存在も忘れ去られようとしている」と心を痛める。供養碑を建てるという「杉崎さんの遺志を引き継ぎたい」と話し「地元や知多の人にも供養に来てほしい」と願う。

楯さんは犠牲者の身元を調べている。情報提供や問い合わせは楯さん＝電０２６３（53）７６２０＝へ。

（吉川翔大）

長延寺にある供養塔。事故で二十数人が犠牲になったと記されている＝長野県南木曽町吾妻で